

「末広会」の思い出

佐 渡 卓

大平先生とのそもそもの出会いは、昭和二十五年頃、池田大蔵大臣の秘書官時代に池田邸で、であったと思う。一見して温厚誠実なご仁とお見受けした。爾来三十年間、末広会では家族ぐるみで親しくしていただいた。

十五、六年前から拙宅で手作りの菊見会を催し、ご懇意の政財界人をお招きしていた。ある秋、私と神戸高商後輩の江田三郎君が歓談しているところへ大平先生がこられ、江田君と握手して隣席に着かれた。「花より団子」と、私の郷里「出雲そば」を数椀おいしそうに食べられながら、ひとしきり三人で政治談義に花を咲かせた。そのうち情勢が不利となるや先生は笑いにまぎらせて、お先に失礼と菊小舎を回って帰られてしまった。大平、江田二両人は、政治的立場は違っていたが、一橋大同窓のよしみか気心の知れた親友のように私には感ぜられた。私より十五年も若いお二人が僅かの間に幽明境を異にした世の無常をしみじみ覚える今日この頃である。

昭和五十二年の夏、私の郷里島根県隠岐島、島前地区の三つの島は、稀有の集中豪雨により激甚な災禍を受けた。その復旧対策に、海士、西ノ島、知夫の三町村長が政府と国会へ陳情のため上京した。ぜひ自民党幹事長にも実状を報告したいとのことで、私に協力要請があった。早速大平幹事長に連絡すると、「これから関西へでかけるがお待ちする」と。私は一行と直ちに国会内の幹事長室を訪ねた。生々しい災害写真と陳情書を丹念に読まれた幹事長は、離島の厳しい条件等を理解して下さったので、三町村長はいたく感激し勇躍、帰島して行った。

それから三年すべての復旧工事は終わり、新しい姿で風光明媚な郷土がよみがえった。私は県知事から送られ

た災害復旧誌を手にして当時を回想、これを大平総理に報告できないことはかえすがえすも残念でならない。

末広会は、故吉田茂先生の意を受け、故高木陸郎氏（当時日本国土開発会長）主唱の下に、故池田勇人先生を中心とする政財界人の親睦会として昭和三十二年二月十八日に発会した。毎月一回例会を開いているが、大平先生は政務多忙の中を第一回より出席された。池田先生亡き後も池田グループの諸先生を囲む会として今日に至っているが、昭和四十二年の夏からは毎年軽井沢でゴルフ会と家族懇親会を催し、すでに十四回を重ねた。

先生はよく奥様とおそろいで参加され、ゴルフ会では二年連続優勝を遂げられご満悦であった。一昨年は大平総理杯を寄贈され、稲山新日鉄会長等と大変楽しくプレイされたが、健闘空しく十位、稲山氏がめでたく優勝、総理杯を獲得された。たまたまその時は第二五〇回に当り、私が永年幹事役を務めた労に対し皆様から感謝状をいただくことになった。前尾先生から直筆の謝状と記念品を拝受、大平総理からお心こもる過分のご挨拶を賜わったことは、一生の榮譽これに過ぐるものなく、謝辞を述べる私は感きわまつた。

第二五七回の末広会は、昨年四月二十一日夕ヒルトンホテルで開催し、五月の日米首脳会談や六月のサミットを中心に、和やかな雰囲気でも総理を激励した。散会退席の総理は、私の手を握り「佐渡さん、お大事にして下さい」と温かい励ましの言葉をかけて下さった。一瞬私の思い過しか、総理は疲れておられるのではないかと直感した。それから僅か一カ月余、神のみぞ知る永劫の別離になるとは。現職総理の壮烈な死は、十五年前の池田総理の当時を彷彿させられ、私の悲嘆は大きかった。

先年、末広会発会二十周年記念に先生から贈られた色紙の、「不苦去日多 只求失日少」は国政に尽瘁されたお人柄が最も出ている遺墨となった。私は掲額してご生前追想のよすがとしている。

亡き友をしみじみ偲ぶ夜長かな たかし

（日本国土開発相談役）